

念頭に置いておかねばならぬことを、ごく簡単にまとめておこう。
 (i) 文学の発生の一大契機としての位置づけが主関心であるためか、その携えるへことばの側面に力点が置かれ過ぎていていること。芸能者としての「伶人」の全体像としては、他の部分での折口自身の、芸能者についての指摘その他によって、まだ補われねばならぬ側面がいくつかあろう。

(ii) これは前項(i)とも関連するが、へことばの側面に視点をしぼったとしても、その運搬・伝播の役割にのみ把握が偏向していること。例えば、芸能者によって担い直されることによって、祭祀・神事のへことばが祭祀・神事の場合から切り離され、変質して行く契機となり、それが文学へと関連して行く、といった視点が考慮されるべきであろう。

(iii) 推理と論理的整合性との産物でしかない存在なのだが、あたかも歴史的事実として証明済みであるかのような筆致で書かれている

五、柿本氏族の「人麻呂」たち

一

折口信夫は、古代の人物伝を考える場合、まず第一に考慮すべきはその人の属していた氏族について知ることだと説く。それは記録上個人の歴史と思われるものでも「数代に亙つての出来事の総合」であったり、「其族長たる人の誰の上にも、通じて称せらるべき家

こと。

(iv) これは前項(iii)とも関連することだが、例えば「漂泊布教者」といった語に典型的なように、中世以後の高野聖・熊野比丘尼といった類の人々からの連想が濃厚であるかも知れないこと。歴史学的に或る程度芸能の知られる後世の芸能者たちの姿を媒介にすることは当然だとしても、その古代におけるあり方とどの点は同じでどの点は違うのかといった厳密な区別づけをして。先に進む必要性を、あまり感じていなかったように見える。

(v) 「乞食者」の説明や、「巡遊伶人」の構成層の原型部分の説明の仕方典型的だが、一つのことについていくつかの論文でそれぞれ異なっていくつかの言い方をしていくという具合なので、それら全部を眺め渡してどうにか全体像を想定し得るといった態のものであること。
 以上、主な五点を挙げておいた。

高野正美

伝の根柢なることに繋がってゐる点が多い」からだとし、これを人麿論の根柢に据えている(1)。以下、柿本は垣の本で、それは宮廷領の境界を守ることの意味し、「地境において、靈物の擾乱を防ぐのにあつたらしい」と言い、さらに人麿の名に言及した上で、柿本氏は「巡遊神人」であつたらうと推定している。これは柿本氏が靈物と関わるとの推定や和邇氏の分れ(小氏)で、和邇神を齋く

一族であること、その具体的な形として同族の小野氏が平安朝以降和邇神と同一神たる小野神を斎ぎ、活発な布教活動に当った痕跡があるとの柳田国男の指摘(2)を援用して、小野氏の布教以前に柿本氏人の巡遊を想定したもので、この想定は一つの信仰様式を同氏族間では繰返すのが常であるとの考えに基づいている。

このような前提を以て折口の人麿論は展開する。まず、羈旅歌に着目し、それは人麿自身の行旅だけではなく「柿本族人の絶えざる漂泊生活の、社会に投じた一つの姿」なのだとし、万葉集に載録された人麿作の中にも「この氏人の旅中作歌——と言ふよりも、巡遊詞人としての吟詠——が多く含まれて居る」と考える。ここで先の「巡遊神人」は「巡遊詞人」と置きかえられているが、前後の文脈からしてほぼ同一の概念であることは容易に窺える。ともあれ、ここでは人麿の他に擬人麿ともいべき人々の存在が予想されているわけで、それは「世間から、柿本人麻呂の名を以て認められた筈の幾多の詞人が、幾代に亘ってあったことも考えて見ねばならぬ」という叙述に至って一層確かな形となる。この擬人麿たちは同世代にも、また、世代を越えても広く想定されているが、この想定は古代の神事職のあり方と重ねられた着想であろう。折口説によると、古代における神事職は、神主以下神職、神人等すべて伝統的な名を以て職掌とし、その名を踏襲すると共に、それらはある「氏」を号し、それに属する神人は血族、氏族、部族としての関係はなくとも、単に籍を置いただけでその「姓氏」を名のつたという。それら何某部の称をもつ神人集団は、その所属する氏の神を斎ぎ、その信仰を持って旅を続け、「落ちついた所に村を構へ、その分割したものが、更に漂泊して廻る」という漂泊生活があったと推定し、その

漂泊する部民は「呪術を行ひ、呪詞を諷誦して廻った」が、これが「神人移動の通有形式」で、「柿本族人の巡遊状態」もこれに等しいと想定している。柿本族の場合には「柿本」を名のることが神人としての資格を表わすことであり、この一族から大詞人「人麿」が出た後には人麿の称号も付加されたと説く。ここで和歌は「唱文」「布教用の呪歌」として用いられたものとされ、人麿の実作の他に多くの和歌が人麿に仮託されているともいう。

一方、民間の歌謡として流伝した人麿の歌を指摘し、伝達手段の未発達な古代にあっては「単なる流行歌として、風のごとく」各地に流伝したのではなく、「柿本族人としての神人の巡遊が、与つて力あったに違いない」とする。それらも布教用の呪歌で、「柿本族人の諷誦したものとして、柿本人麻呂の歌」となったとも説いている。つまり、「人麻呂の歌は多人数の諷誦用の代作であり、宗教歌であり、又同時に創作歌としての方面をも兼ねていたのだ」とも、「人麻呂の作物は、代作・創作の上に、その作物の民謡化したもの、或はその作物と仮定せられたものゝ外に、一部の『柿本氏人』の諷詠があった」ともいい、その結果「實在の個人柿本人麻呂と、柿本人麻呂を以て呼ばれた、群衆の神伶柿本族人との交錯が、明らかには弁別出来ない」という点に帰着する。

二

このように折口信夫の人麿論は、一般に信じられている一官人としての人麿像に大きく修正を迫る形で提出された。それは昭和八年の発表時点でも、また数十年経た現在でもその事情は大きく変化したわけではない。もちろん折口説とて一官人としての人麿の存在を

否定しているわけではなく、それはそれとして認めた上で擬人曆たちを想定しているのだが、その点にこの説の複雑さが潜んでいると思われる。

折口の人曆論の中心となる柱は次の三点であろう。一つは巡遊神人と称する布教集団を想定していること。次にはその巡遊神人と柿本氏とを結びつけ、宮廷詞人「人曆」の出現後は、その一族に「人曆」を称する幾多の詞人たち——擬人曆とでもいうべき人々が実在したと想定している点。さらには、人曆の和歌はその巡遊神人たちの諷誦する「唱文」とか「布教用の咒歌」であると規定し、さらにそれらは人曆の作か、擬人曆の作か判別し難いとしている点である。

ところで、折口学では巡遊者は「巡遊神人」「巡遊詞人」「巡遊伶人」と三通りに表現されているが、これらは個別的なものではなく同一の概念で、それぞれ宗教的側面、韻律的側面、芸能的側面に重点を置いた表現かと思われる。柿本氏の場合は巡遊神人、巡遊詞人と規定しているが、先述の如くそれは柿本氏と同族の小野氏の齋く小野神の布教活動からの類推である。ただ、ここで後世の小野神の布教活動からの類推として柿本氏の巡遊が想定できるにしても、同族中、何故柿本氏だけが巡遊の状態にあったのかという疑問は残る。もっとも、柿本を「垣の本」とし、境地において「靈物の擾乱を防ぐ」任にあったとすれば、祭祀に関わる氏族ということでは不思議はないが、「垣の本」を本義としながら、あえて「柿本」と表記されるに至った事情は、単に音借ということでは不十分であろう。敏達天皇の時家門に柿の木があったからとする新撰姓氏録の記事は、もちろん後の付会であろうが、かりにこの一族が元来祭祀を職

掌としていたにしても、このような付会が為されること自体、その本義が忘れられて久しいことを語っていよう。従って、「柿本」と表記される段階では既にこの一族は祭祀から遠く離れていたとも考えられる。

また、巡遊伶人を説明して「此国の到る処の山陰や海沿いの村々に、叙事詩を撒布して歩いた旅行集団」と規定し、それは「神人にして芸人である」(3)ともいっており、これとは別に巡遊伶人の発生に触れ、大和朝廷に服属しないで保護を失った者たちが、自分たちの神を持って流離し「村や国々の祝福をして歩いた」(4)ともいう。とすると、巡遊伶人は体制からはみ出て零落を余儀なくされた人々と読めるが、先にも触れたように巡遊神人、巡遊詞人、巡遊伶人がほぼ同一の概念で、重点の置き方の相違による表現上の区別だとすれば、柿本氏も体制からはみ出て零落し、流離したことになる。その事と宮廷に出仕した官人としての人曆とはどのような関係にあるのか。或は柿本氏を説明する巡遊神人、詞人と、別に説く巡遊伶人とは別の概念なのか。さまざまな疑問が生じてくる。或は柿本氏が宮廷領の境界を守るべき任にあったとすれば、祭祀に携わる一族の一員として人曆も宮廷に仕えたのかも知れない。だが、かりにこれが事実であったにしても、こうした人曆の在り方は柿本氏の巡遊を決定づけるものではない。当時の社会に体制からはみ出て漂泊を重ねる芸能集団が存在したことは確かであろう。万葉集中の乞食者の詠(16三八八五・六)などはその残滓であろうが、その存在自体は柿本氏の巡遊を保障するものではない。当然のことながら、この問題は「人麻呂」を称する幾多の詞人たちの存在の当否にも関わってくる。かりに柿本氏に巡遊する神人、詞人たちを認めること

ができたとしても、それが直ちに「人麻呂」を称した幾多の詞人たちの存在を確認したことはない。さらに詞人たちの存在にあっては、人麿の羈旅歌が「布教用の咒歌」でなければ意味を為さないわけだが、旅中での漂泊感を基調とした人麿の羈旅歌を「布教用の咒歌」と規定する為には、和歌と漂泊生活との関係が提示されねばなるまい。

というわけで、折口の提示した人麿と「人麻呂」を称する複数の存在を想定する見解には疑問や否定的側面が強く、このままではとうてい首肯し難いが、だからといってこの説を全面的に否定してしまうのは早計であろう。細部を切り捨ててみれば、この論には古代における歌のあり方に対して極めて重要な問題が示唆されているとさえ思える。それは人麿の名を冠した作品が必ずしも一個人たる人麿の作とはいえないという点で鮮明になってくる。複数の「人麻呂」の概念を導入したことの意味はここに求められるのではないか。そこで思い当るのは人麻呂歌集の問題であろう。この歌集については近時の精力的な研究によって明らかになった面も多く、大方の支持する所は人麿の作品が多く含まれていることと、それが人麿

六、折口学への懐疑

1

折口信夫の学問に対し、折口学という呼称が与えられてすでに久

の若い頃、天武持統朝の頃の作とする点で一致しているが、一方、景物や情感等の面から必ずしも人麿時代のものばかりではなく、それ以降の作も含まれているとの反論もある。この問題——同時代における人麿以外の作品や人麿以降の作品の存在をどう処理するか、という点で数々の疑問はあるにせよ、それらを統一して把握する視点として折口の提示した人麿複数説は批判的に継承することが可能ではないかと思われる。折口は単に複数の「人麻呂」を想定したのではなく、その概念を導入することで当時の歌のあり、ようを問うたのだと見ることができよう。

(注)

- (1) 「柿本人麿」春陽堂『万葉集講座第一巻』所収。以下ここでの人麿論はすべてこの論に基づいている。
- (2) 「神を助けた話」『柳田国男全集第十二巻』所収。
- (3) 『折口信夫全集第十二巻』三三三頁。
- (4) 『折口信夫全集第十巻』一六四・五頁。

村 井 紀

しい。この呼称が語るように詩人学者としてのかれの業績は、一応民俗学や国文学といった領域に分類できるものの、近代のこれらの枠組を方法及び対象の点でしばしばこえ、結局われわれは個人の名